

昭
文學全集

正宗白鳥集

昭和二十九年四月十日 初版印刷
昭和二十九年四月十五日 初版發行

昭和文學全集 34
正宗白鳥集



著者 正宗白鳥

發行者 角川源義

印刷者 小田茂作

東京都品川區大井寺下町一四三〇

發行所

東京都千代田區
富士見町二ノ七

角川書店

振替東京一九五二〇八
電話九段一〇九四・八七〇八

本文紙 本州製紙株式會社
クローズ 日本クロス工業株式會社
整版所 曉印刷株式會社
印刷所 東日本印刷株式會社
製本所 小泉製本所



正宗白鳥
昭和二十九年一月（七十六歳）角川書店にて

正宗白鳥集

昭和文學全集

角川書店版

目次

卷頭寫眞

筆蹟

根無し草

日本脱出

人間嫌ひ

近松秋江

ある日本宿

髑髏と酒場

作家論

夏目漱石

島崎藤村

岩野泡鳴

徳田秋聲

永井荷風

自然主義文學盛衰史

受賞の日

解説

年譜

杉森久英

九

一四三

一六六

二二九

二四八

二五五

二五九

二六六

二九二

三〇八

三三三

一九五

三九四

三九七

正宗白鳥集

文筆生活五十餘年わが痛感
した事は努力の効乏しく偏へ
天分次第である事である

正宗白鳥

根無し草

一 外を恐れる

老人は過去を語りたがるものである。功成り名遂げた老人は、殊に自分の手柄話をしたがるものである。大隈重信侯は、將來について談論されることは好きだが、過去を語ることは好まれない。だから、「大隈さんはえらい」と、私は、かの侯爵に接近してゐた早稻田の先輩から、屢々聞かされてゐた。しかし、未來は茫漠としてゐて、天下國家の事でも、個人の事でも明晰に分る筈はない。明日以後について、われわれはつねに、希望を抱き空想を描いてゐるにしても、それがどう實現するかは、その時が來て見なければ分りつこない。

大隈侯にも、「昔日新」といふ書物がある。明治以後のさまざまな政治家や實業家や教育家などが、自傳風に自分の公生涯や私生活を語つた書物がいくつも出版されてゐる。こまごまと自分の過去の経歴を語るの、近代の小説家の常套である。この地上の生活の終る頃になつて、幼年時代少年時代を回顧して懷しむのは、内容は平々凡々であつても、さう

いふ心根には、所謂「人間味」があつて結構至極であると思つていい。私の母は八十歳を越してゐるが、この頃は、中年期老年期に経験した事は殆んど忘れて、幼い時代や嫁に來た時分の事がありありと今日に見てゐるやうに思出されると、御當人が述懐してゐる。それで、先頃も、嫁入りに持參した鏡が見つからないが、誰れかが持つて行つたのぢやないかと騒ぎ出した。「おたけが此間何か風呂敷に包んで裏口から出て行つた」と。鏡を取つてこつて裏口から出て行つた」と、女中のおたけを責めたので、おたけは泣いたり怒つたりした。「そんな古い鏡を誰れが欲しがるものか。さういふ鏡があつたかどうか。何十年にもわし等は見たことがなかつた」と私の弟などが云ふと、「有つたとも有つたとも。その鏡は毎日使つて居つた。古うても、ゆはれのあるええ鏡ぢやつた。今時のやうなお粗末な鏡ぢやなかつた」と、老母は今その鏡に自分の面影が映つてゐるやうな、視力の乏しい目を見据ゑた。

「あの時分は近所のものがよく寄つて來て世話をしてくれた。この頃の人間はみんな薄情になつて、家の前を通つて居つても聲を掛けられるものも無うなつた」老母は歎息して、五六十年前も昔の知人の、おさとやおくめやおかさんや、久藏や松太などの名前を、記憶の底から呼出して、懷しさうにそれ等の村の男女の話をした。少し頭がぼけて物忘れをするくせ

に、さういふ昔話になると印象鮮明である。私の顔を見ながら、母は今の私をそのままに見てゐないで、幼少の頃の私を見てゐた。私は驚つてゐる。襖につかまつて立上がらうとする。よちよち獨り歩きの稽古をする。それで、現在の私も、平生考へてゐない自分の幼い頃を強ひて思出されるやうになりだした。

かつて溺死から蘇生した男の話を聞いたことがあつたが、その男は獨身であつたせうか、死の瞬間には一團に母親の事を思浮べたさうである。地獄へ墮つるとも天國に上るとも、母親に取纏らうとしたさうである。私も早晚免かれ得られない死の瞬間には、この兩眼の殆んど盲目、手足の痠えてゐる母親に縋りつかうとするのであらうか。その光景を鏡に映して見る如く想像してゐると、幽鬱な感じがしないでもない。

この老母は昔を思出して懷しがつてゐても、昔の自慢話をするのではない。十人もの子供を産んで育てたのに關はず、それを手柄にしてゐるのではない。「老人の話なんぞ些つとも面白くないから、だれも相手にして呉れんのぢやらう」と歎息したりしてゐる。數年前に亡くなつた私の父親は、たまには自慢話らしい話をしたやうであつたが、聞手の方で感心しながら耳を傾けたためにはなささうであつた。

母の古鏡愛著も噓へない。私も幼少の頃に

自分の所有物として親しんでゐた物が、いつの間にか紛失したり消滅したりしてゐるのを、今はじめて氣附いたやうに氣になった。明治二十年代の民友社出版のさまざまな書冊は大抵揃へて有つてゐたし、高價な新刊書や古典を幾冊か寫したことも覚えてゐるが、それ等の物が今は家の中の何處にも見當らない。大勢の身内の誰れ彼れが數十年の間に、鼠が曳くやうにして持つて行つたのか、紙屑屋にでも賣られたのか、私の知らん間になくなつてゐるのである。水火の災難に會ふことがなくても、所有者がしつかり監督してゐないと、物はおのづから無くなるのであらう。

雜書の百冊や二百冊はどうなつても構はないので、今まで何十年の間氣にも留めなかつたのだが、この頃は、それ等が自分の幼馴染のやうに懐しく思はれた。誰れが奪つて行つたのかと、母が古鏡の行衛を氣遣ふやうに氣に掛けた。『八犬傳と水滸傳とは、次から次へとみんなが讀んだものだ』と、弟は云つた。

「ああいふ小説が誰れにも面白いのは不思議だね。それよりも、明治に出た本は近年非常に珍重されてるんぢやないか。讀んで面白くても面白くなくつても高い價で取引されてるさうだ」

明治の雜著は内容は貧弱でも、近來貴重な古本あつかひされてゐると、噂に聞いてゐるため、私もそんな物に急に有難味を覺えだしたやうでもあつた。さういふ淺はかな流行に心を動かされたしたのは、私が年が寄つて頭がぼけたためであるか。私が幼少の頃、祖母や父親にせびつて買集めて讀耽つたやうな、明治初期の雜著が今の市場で價値が出たのなら、あの時分に活動してゐた人間をも高く價踏みしてゐるのかも知れない。老母が頻りに思出してゐるおくめおかん久藏平作などの生涯も珍重して追憶してやつてゐるのかも知れない。

……あの時分の私は外が怖かつた。母親に刺戟されて、老いた私は一層老を重ねたやうになつて、幼少の時分を懷しさに、自分で自分に甘えるやうに追想したが、あの時分の私には外が怖かつたやうだ。半世紀あまりの長い間、兎に角浮世の波を泳いで來た私が、それはど臆病であらう筈は無いとも思はれるが、『つねに世を怖れてゐた自分』が、濃厚にわが目の前に映しだされるのを如何ともし難い。現代の或哲人が晩年、子弟に向つて、『何が冒險だと云つて凡そ人間の生きとて、位冒險なことではないよ』と云つたことを、その人の感想錄集で讀んだが、私は幼少にて早くも生存の冒險を感じてゐたやうなものだ。

村の寺院の本堂を教室にした小學校で初等科の教育を受けたあと、隣村の學校で高等科を修めることになつたのだが、十歳になつたばかりの羸弱の矮軀で眞冬の一月から一里の道を通つて行くのがつらかつた。半分は道路

のない波打際を通るので、滿潮の時には岩の上を傳はなければならなかつた。小川があつて、その上には獨木橋が掛つてゐた。それよりも幼い神經を悩まされたのは、村の通學生が行列をつくつて往復することであつた。幼年者保護のためであらうが、學校の規則として、背丈の順で列を揃へるので、最も身長の高い私は、小さな校旗を持つて眞先に立たねばならなかつた。旗持になるだけでも一つの負擔なのに、後の長身の奴等は、『早く歩け』だの、『もつとゆつくり歩け』だのと毎日自盡な注文をするのだ。仲間の大きい人間が小さい人間をいたはつて、年少者に步調を合はせることは決して無かつた。私は幼な心にそれを痛切に感じた。屢、小さい足で、せかせかと息苦しく、石ころの水際を急がなければならなかつた。ああ、行列なんかに加はらないで、一人ぼつちで、『八犬傳』で馴染になつてゐる犬士の誰れかの玉の行衛でも空想しながら、學校通ひをしたなら、どんなに氣樂であらうかと、考へたこともたびたびあつた。學校では木銃を持つて兵式體操をやらされるので、力の弱い私はひよろろひよろした。

私は外を怖れてゐた。しかし、そのために學校通ひを休みたいと思つたことはなかつた。學校で教へてくれる事は學ばなければならぬと、傍から注意されないでも、自分でよく心得てゐた。それで、夜眠りに就く時には、いつも祖母とか母とかに向つて、『明日、學校

の時間に遅れんやうに起して遅いよ」と、繰返して頼んでゐた。そのくせ、目敏い私は、下男下女の起る氣色がすると、直ぐに目を醒ますのを常例として、寢過したことは一度もなかつた。日曜日にでも朝は早く起きたが、この日は樂しみの日で、教科書以外の何かの書物を、分つても分らなくつてもぼつぼつ讀續けて一日を過してゐた。弟や近所の子供と將基を差すとか根木打をするとか、何かの遊びをすることはあつても、「外を恐れる」氣持は歳とともに濃厚になつてゐた。それに關はず、天氣のいい或日曜に、私は獨りで、東京か大阪へでも、遠い所へ行つて見るつもりで、貰ひ留めの小使錢を入れた財布を首に掛けただけで、家の者には無斷で家を出て行つた。「今日は學校は休みぢやないか。何處へ行きなさる？」と敵仕事をしてゐる男に聲を掛けられたが、返事もしなかつた。道を急いで村を離れて、それから東へ向つて國道を何處までも歩んで行くことにした。外を恐れてゐた私がそんな突飛な事を思立つたのは不思議なやうであるが、それは、不斷讀んでゐた少年用の雜誌や、新古さまざまな作り物語に刺戟されたためであつた。新開地の神戸へ移住した村人や、北海道開墾に出掛けた備前の舊藩士が私の家を訪問した時に話した異郷の光景も、私の心を刺戟したらしかつた。村の誰れ彼れのやうな人間のゐない土地、學校通ひにうしろから私の歩き方まで、

荒い言葉で指圖する奴のゐない土地、汚い人間や亂暴な人間のゐない土地、綺麗な鳥が綺麗な聲で唄つてゐる土地、さまざまな面白い見世物の見られる土地、同じ地球上の土地でも、自分の今住んでゐる村とはまるで違つた、お伽噺に出てゐるやうな面白い土地、さういふ所へひとりで行着けさうな氣がしたのであつた。日のうららかに照つてゐる平坦な道を、誰れにも突つかれないで氣儘に歩み續けた。身體がいくら汗ばんで喉が乾いたので、小川の水を手ですくつて飲んだりしたが、次第に腹が空いて來るのには困つた。通りがかりの村には、うどん屋がある。一ぜん飯屋がある。薄皮餅など店先に並べてゐる店もある。見てゐると唾液が垂れさうになつたが、知らぬ家へ入つて飲食ひしたり、食物を買ふことは躊躇された。それで、路傍の木蔭に腰をおろして、財布の紐を解いて中身の小錢を丹念に數へて見たが、さうしてゐるうちに、夜明けの寢床の中で、「これだけあれば」と頼りにした財産と、金高は同じことで、一錢一厘増しも減りもしないのに、「こればつちでは」と、急に心細く思はれた。あの時、大判小判のやうにびかびか光つてゐた一錢銅貨や五厘錢が、威光のないただの銅貨となつてしまつた。それとともに、日に輝いてゐる道の彼方へ歩きつづけるのが不安になりだした。

夢から醒めたやうにあたりを見廻して、私

は外が恐ろしくなつた。恐ろしい思ひに覆打たれると、矢も楯もたまらなくなつて、財布を懷にねぢ込んで、今まで歩きつづけて來た道をせかせかと逆に歩きつづけた。そして、うしろを顧ることもなく、自分の村まで戻つて來て安心して息を吐いた。私は、この一日の不思議な旅について誰にも語らなかつた。その程度の脱線なら、大抵の年少者が経験してゐることであらう。私などは外面に現はれた脱線行爲は、他の同輩に比してむしろ妙な過ぎたのであらうと推察されるが、「外を恐れる心」は、私の幼少時代を平穩無事坦々として過ぎせなかつたやうでもある。日本は現代に至るまで烈女賢母と稱せられる女性に富んでゐて、諸方面の名士の自傳風の自慢話を讀むとそれ等名士の母堂の多くは、大抵烈女型であり賢母型であつて、毅然たる態度で兒女を教育するのがお極りで、「男子として女らしい振舞をするな」「卑怯な眞似をするな」「家名を辱めるな」と、御先祖のお位牌など持出して訓戒することさへあつたやうである。時と場合で切腹を實行しなけねばならぬと、豫め切腹の方式をも授けるくらゐ用意周到な母親もあつたやうである。嬰兒の時からこんな峻烈な家庭教育を受けてゐたなら、「外を恐れる」氣持なんか心に巢くふ餘地はなかつたかも知れないが、私の母親は烈女たる資格は全く缺いてゐた。兒女に對しては母親以外の何でもなかつた。子供の教育の出來が惡

いと、受持の教師へ附届けをして、試験の點を甘くして貰はうと企みかねまじき有様で、學校への通路の一つの障礙物であつた丸木橋を舟板に取替へることを思立つて、近所の通學生の親達を説伏せて、各、十錢か十二錢づつかの架橋費の割前を出させて、私が毎日遭遇する危険の一つを取拂つたこともあつた。他の學生やその親達は、橋の事なんか、それが丸木橋であらうと、石橋であらうと、太鼓橋であらうと、てんで氣にしてはゐなかつたので、「餘計な物入りで迷惑だ。自分の子が橋からすべり落ちるのが心配なら、自分で全部費用を出してかけ直せばええ」と、蔭口を云つてゐたらしがつた。

私にしても、丸木橋の危険は左程に恐れてはゐなかつた。そして、「外を恐れる」私の心は、母親などの目には映つてゐなかつたのである。たとへ明らかに映つてゐたにしろ、橋を直すやうに直す譯には行かなかつたのである。それで、外を恐れる心は誰れに干涉されることもなく、蔓つて行つたのだ。根を固くし枝を延ばし葉を繁らせたのだ。

通學の途上、猛烈な大雷雨に會つて、幾たむも石ころの上に伏せつて傘で身體を庇つたのも一事件であつたが、さういふ時には行列も亂れて、腕つふしの強い、力自慢の奴等も一しよにへたばつてゐるのが私の目に映つた。これだけの人數のうちのだれが雷に打たれて八裂きになるかと私は傘の隙間から窺見

した。「憲法發布」のあつた直後の或晩、釣ランブの下で食事をしてゐるところへ、村役場から歸つて來た父が、文部大臣の森有禮が誰れかに斬られたと、東京から傳はつて來た噂をするのを聞いたのも、幼い時分の一大事件であつた。大津事件を學校で聞かされたのも、あの時分の私に取つての一大事件であつた。

「コクカイが開かれるさうぢや」私は父親や教師の話してゐるのを、傍で耳に留めて不思議に思つてゐた。私は放課時間に校庭でその事を話して、「コクカイは國の界ひの事で、國の界ひが開くのがやらう。國の仕切りの門が開くのかも知れないぜ」と、朋輩に告げた。

「どこの國との界ひぢや」と、朋輩も不思議に思つて訊ねた。

私にもそれは明らかでなかつた。かつて聞いた遠い北海道の、その先の方の事かと思つたりした。雪の中から、熊が出て來るといふ北海道よりもつと遠方の事を想像すると、心が蕩けるやうであつた。

「今は蒸氣船に乗つたらどんな遠いところへも行けるんだぜ、何百里でもある所へ行けるんだぜ」

「漁船に乗つても紀州へでも土佐へでも行けるぢやないか」

「土佐は四國の中ぢや。地圖で見ると直ぐ傍ぢやないか。わしは去年蒸氣船に乗つて讃岐の金比羅港へ詣つて來たぢやが、わしは船に

乗ると直ちに酔ふから船は嫌ひぢや。蒸氣船なら酔はんだらうと思つとつたのに臭いにはひがして直ぐにムカムカして胸が悪うなつた」「わしは船が揺れるのがええ氣持ぢや。夏の夜は船に寝るとええ氣持ぢや。船は涼しいぜ」

私はその船暈をしない少年が羨ましかつた。假に酔ひさへしなければ、いつか、國の界ひを越した遠い所へ行かれるだらうのにと、自分だけはその資格がないのが詰らないやうに思はれたりした。學校の歸りに、村への歸り船にみんなが乗せて貰つたことがあつたが、仲間の者が面白さうに戯れてゐるのに、私だけは目をつぶつて頭を抱へて打伏してゐるやうな腑甲斐ない有様であつた。

さういふ有様だから、自分の家の中にあるて、季節が多であつたら、晝間は日當りのいい縁先に小机を置き、夜は小さなランブの側で火鉢にあたつて、何かの本を讀むのが、自分の心に最もふさはしいのであつた。だから、老年の私は故郷へ歸つても幼い時分に同じ列に入つて學校通ひをした、生残りの知人に會つて舊を語らうとする氣持になるよりも、昔讀み馴染んでゐた雜書を座側に置いて見たかつたが、それが殆んどすべて散佚してゐたので、「さうと知つたら土藏の長持へでも入れて、眼鏡を掛けて置けばよかつた」と後悔された。

「お前はこの生れた土地に一生住まつて居れ

ばよかつたのに。長い間他所へ行つて損をし
たやうなものぢやないか」母は、私が幼な顔
から一足飛びに老顔になつたとも思つたら
しく薄目で私を見詰めた。

「損が得か、算盤で勘定は出来ないね。百俵
や二百俵の小作米をあてにして此處にぢつと
してゐたら、一生がどうなつてゐたらう？」
これは、母に解決の出来る問題ではなかつ
たが、「どちらにしても同じことぢやないか」
と、母が答へてゐるやうに、その時の私には思
はれた。

私の幼少の頃、一町かそこらの田地を有
つてゐるだけで、毎日暮を打つて暮す者があ
つた。季節々々の魚釣りに出るだけで何もし
ないで、一年を過す者もあつた。何もしない
で歳を取つて祖先以來の僅かな財産を噛り盡
した後、四五軒の知るべを順繰りに廻つてゐ
たお爺さんが私の頭に印銘されてゐる。私の
家も何日目かにそのお爺さんに晩飯を施すこ
とになつてゐたが、或日食後に風呂に入らせ
た時、丁度來合せてゐた近所のお婆さんが、
「山口屋の旦那の着物には蝨がうじやうじや
しとる」と云つて、その爺さんの汚い衣服を
泥溝の上で振りたいた。首に掛けてゐたお
守袋にも蝨がたかつてゐた。

私がさういふ種類の人間の一人となつてこ
の村に老いたとしても、どつちだつて同じ事
ぢやないかと、母に云はれてゐるやうなつも
りでその目を見てゐた。

諸名士の自傳を見ると、大抵は烈女賢母型
であつた母親から有難い感化を興へられてゐ
る外に、漢學の教師や手習の師匠などから、
一生忘れないほどの強い感化を幼い時に受け
たことが、昔懐しげに述べられてゐるが、私
にはさういふ種類の人はなかつた。漢學のよ
く出来るといふ小學校の教師は、六ヶしい面
白い文字を教へてくれたので、私はそれ等の
字句はよく覚えて、作文の折に應用して得意
になつたりしてゐたが、思想らしい事では何
の印象もその先生から受けなかつた。小學校
卒業直後に、郷里の近所に在つた私塾のやう
な學校で、知名の漢學者から孟子の講義を聞
いた時でも、字句を覚える樂しみ以外に、精
神的な何の感化も受けなかつた。十八史略で
も靖獻遺言でも、書物そのものは面白くつて
も教へて呉れる先生に心服したり追隨したり
することはなかつた。物を習ふ時には本の土
にのみ注いで、先生の顔を仰ぎ見ることはな
かつた。先生は私を威壓するらしい顔をして
ゐるので、見るに氣味の悪い思ひがされた。

先生を尊い人として畏れるのぢやなくつて、
ただ怖い人として、私に懲罰を與ふる力を所
有してゐる怖い人として對座してゐるやうで
あつた。自分の體力の弱い事は、物心のつい
た時分から知り盡してゐた私は、先生を怒ら
せたら、その鞭に對抗出来ないやうに思つて
ゐた。關羽でも張飛でも、花和尚魯智深で
も、墨旋李達でも、書物で見てゐるだけなら、

その人となりも行爲も勇ましくて面白やうに
思はれたが、それ等の書中の豪傑が生きて私
のまはりをウロウロしてゐたなら、近づいて
親しめなかつたであらう。

私は先生に鞭打たれたことはなかつた。烈
しい言葉で叱られたこともなかつた。たまに
は褒められたことがあつた。褒められる悦
しきは早くから味はつてゐたが、しかし、先
生なんか褒められるのは、虎か何か無で
られてゐるやうな氣がしないではなかつた。
寺の僧侶が不柔順な小僧を折檻して兩手を繩
で縛つて、繩に火をつけたので、小僧の手首
に焼け跡が残つてゐると、近所の人の話すの
を聞いたので、私はその焼け跡を、當人の氣
づかぬうちに、注意して見たことがあつた。
成程痛ましい跡が手の皮に刻まれてゐた。私
はこのふてぶてしい小僧には不斷から親しま
れなかつたので、苛酷な折檻を氣の毒にも思
はなかつたが、ぶよ／＼肥つた、眉毛の長
い、人のよささうな大僧侶も油斷のならない
怖い人間として、私の眼に映じた。僧侶
の有難がつてゐるお釋迦様も弘法大師も、こ
の僧侶のやうに油斷のならない佛様であつた
かも知れない。祖母の納棺の時に、「大師様
のお伴をしてお出でなされ」と、近所の婆さ
んがまことしやかに云つてゐたが、おとなし
くお伴をしても何處へ連れて行かれること
か。油斷のならない氣持は、早くから私の心
に萌してゐた。

二 永遠の恐怖

近所の惡童どもが、垣根を破つて庭へ入つて、熟した柿の實をもぎ取つてゐるのを見つけた老人が、逃げおくれた惡童の一人をつかまへて、高い聲で叱りつけてゐるのを、通り掛りの私は垣根の外に立つて聞いてゐたが、老人の惡口のうちに、「公方様に願うて、村から追出してやる」と云つたのが、幼い私の耳に變に響いた。公方様と云ふのは何の事やら分らなかつた。それで、學校の先生に訊ねると、先生は、「さういふ者は今は何處にも居らん。」と云つて、公方様は將軍様の事で、徳川征夷大將軍は二十年も前に滅亡してゐるといふやうな話の筋を、どうにか私にも分る程度に話してくれた。とつくの昔に無くなつてゐる公方様や將軍様は怖くはない。死んだ人間を持出して脅かさうとした爺さんは阿呆であると私は感じたらしかつた。

公方様よりも征夷大將軍よりも、サーベルを提げてゐる巡查の方が、幼い私の心に畏るべき存在として映つてゐたのであつたが、私が濱つたひに通つてゐた高等小學の所在地には、警察署があつて、その署長さんの息子は小學の教室で特別の席を持つてゐた。私と同級ではなかつたが、その子が他の生徒と離れて自分一人だけの机と腰掛を具へてゐるのに私は目を留めて異様に感じてゐた。その署長さんは、遠い九州の端の、鹿児島縣薩摩から

來たのださうだ。東京土産の錦繪で見た西郷隆盛は薩摩の人間だ。隆盛と同じ國から來た署長さんはえらい人間にちがひないと、私は思つてゐたらしい。幼少の頃の白紙のやうな頭に刻まれた知識は一生拭ききれないものらしいが、人間の靈魂の行衛と云つたやうな問題が氣掛りになる癖があつたのは、誰れの感化であらうか。嬰兒の時から私の目に映り耳に入つた種々雑多の事が、おのづから私の頭にさういふ思ひを植ゑつけたのであらうが、これは私の一生に取つて輕視されない事件であつた。靈魂といふ型に入つた言葉では私の實感が言現はせなくつても、私の知つてゐる言葉で適切な者が外に有りさうではないので、爲方なしに、有り振れた言葉を使つてゐるのだが、おれの靈魂はどうなるのだと氣に病むことがあつた。風邪を引いて少し熱が出た時に、「大きな者が来る」と泣叫んだので祖母は私を臆病者だと云つてたしなめた。親に似て臆病だ、舊の子は舊だと手酷しいことを云つたのも、私は覺えてゐるが、惡魔（こ）れも適切な言葉がないため、止むを得ず、舶來語を借用するのだ。が、毛むじやらの大きな手で私の靈魂を掴みに來るのを感じたのであつた。學校の先生にも、サーベルを腰に垂れてゐる巡查にも、腕力の強い近所の子供にも、こちらから逆らつて行つちやかなはない。喧嘩をしたら負けるに極つてゐると、私は早くから自分の身の程をよく知つてゐた

が、自分の靈魂も甚だ弱くつて惡魔のやうな者を相手にしてかひひつこないことをよく知つてゐた。麻穀（あさく）をへし折るやうに折られるだらう。小さい蟲を踏潰すやうに踏潰されるだらうと思つても見た。地獄に落されて赤鬼青鬼にこづき廻されるを考へることもあつた。そんな風に靈魂の行衛を案じる癖があつたとは云へ、日常よく考へてふさいでゐたのではなくつて今日、差當つて氣遣はれる者は、寒い風であり、焦げつくやうな日の暑さであり、差當つて怖いものは、あたりの彼奴此奴の人間であつた。男子たるもの、寒暑にへこたれるやうぢや爲方がない。寒稽古をし、土用稽古をしろ、と武士道の權化らしい先生に戒められたので、その教へに従はねば惡からうと恐れて、夜明け前に蒲團を蹴つて起きて、素足で校庭の霜を踏んで撃剣の寒稽古をして、それが原因で肋膜炎のやうな病氣に罹つたこともあつた。靈魂の行衛がいろいろに書かれてゐるらしい新約全書を購つて讀んで見る氣にもなつた。そんな氣持になられたのが神様のお導きですと、田舎の傳道師が有難味をつけて呉れたが、柄にない撃剣の眞似も、聖書の盲目讀みも、生きるための努力であつたかと、後年遠い昔を回顧して我身ながらも不憫に思ふこともあるのだ。

私が修學のためにはじめて上京したのは、明治二十年代の末年で日清戦争後の國運隆々たる時期であつたが、年少でまだ世間的知識

の乏しかった私は、時世については何の理解もなかつた。昔の人が「花のお江戸」を讚美してゐたやうに、「花の東京」を憧憬してゐただけであつた。汽車は故郷から東京まで通じてゐたのであつたが大阪の親類の家に立寄つて、東京の事情などよく訊ねて、準備を整へて出掛けることに、両親が豫めその家へ手紙を送つて打合せてくれてゐたやうであつた。

親類と云ふのは、母の姉の嫁してゐる家であつたが、主人は西南戦争時代の軍醫で、當時は大阪の場末で病院を經營してゐた。醫師としての技術や、世間の評判はどうであつたか知らなかつたが、正七位か従七位かの位階が松田眞作といふ名前とともに表札に記されてゐるのを見て、子供の時分の私は、敬意を寄せたことがあつた。私の親類のうちで「位」を有つてゐる人は、この人一人であつた。この人は、よく親類知人の世話をした。當人が世話好きな譯でもなかつたのだらうが、自然にそんなことになつてゐた。私の家でも祖母も両親も子連れ孫を連れて、名所見物や博覽會見物に行つて、その松田家に幾日も滞在した。伯母の實家が破産した後には、伯母の両親は末娘を連れてその家に寄食して、父親はその家で發狂して死んだ。私が一度母に隨いて大阪へ行つたのは狂死した祖父の葬式に列するためであつたやうだ。上京の途中立寄つた時には、私の父の弟が松田病院近所に室借りして住んでゐた。この叔父は醫學修業の

ため東京に滞在してゐた間に重い脚氣に罹つたので、松田家を手頼つて大阪まで戻つて來て、此處で靜養してゐたのであつた。この叔父は妻と乳呑み子を松田家に預けて東京へ行つてゐたので、私が訪問した時には、親子三人仲よささうに住んでゐた。

私は豆腐汁で晚餐を爰はれて、炬燵に當つて夜の更けるまで、叔父から東京の事を聞かせられた。叔父は首に掛けた財布から小錢を出して叔母に與へて「お前ももつと滋養になる物を食べなさいいかなんせ。牛乳なんかもまづくてももつと飲むといひ。乳がたつぷり出るやうでなきや困るから」と云つたりしてゐた。

「わしは東京には懲りた。もう二度とあんな所へ行かうとは思はん。空つ風が吹いてひどい埃の立つ土地ぢや。氣候は悪いし食べ物もうまくない。下宿屋では身體の養ひになるやうな物は食はしやせん。朝は鹽水のやうな薄い味噌汁だ。晝や晩には、ゼンマイとかズキキとか、ヒジキとか、子供の時から食べたことのないやうなものをよう食はせられた。魚と云つちや、鹽つ辛い鮭ぐらゐがまだしも魚らしい味がするぐらゐぢや。米だつて、バサバサした悪い米ぢや。田舎ぢや、下男下女でもないん物は食やあせん。毎日そんな下等な、榮養にならん物を食つて居つたから脚氣になつたのぢや。生れながらに頑丈な若い者なから、それでも命を續けて學問してゐられやう

が、弱い者は、脚氣にならにや胃病になるか、肺病になるか、身體の何處かに故障を起すに極つとる。お前も學問するのに、わざわざ東京へ行かないでも大阪でも京都でも出来るぢやないか」

叔父は、私の東京行にまで餘計な差出口を利いた。私は叔父の東京感想をそのままに受入れはしなかつたが、多少の不安は覺えた。「下宿の食べものがそないに悪いのなら、僕も毎日牛乳を買つて飲むことにしようかな」と咄嗟の思附を口に出すと、

「それは牛乳や卵を食べるのは、榮養の足しになつてよからう。しかし、東京といふ土地は人間の身體にいい土地ぢやないよ。それに東京の下宿屋といふものが、食べ物事は別として、甚だよろしくないのぢや。知つた者同士で泊つて居るのならいいんだが、右の部屋にも左の部屋にも知らん男が泊つとるんだから油斷がならない。それに下宿屋で病氣をして見い、どもならんぜ。わしも今度はえらい目に會つた。」

「東京にはえらい醫者が居るぢやらうから、さういふ醫者に診て貰うたら大抵な病氣がよくなるんぢやないかな」

「いや、どんな大博士が見たて癒らん病氣は癒らん。わしも醫者になつてからあつちこつち土地を變へて開業して來たものだが、自分の經驗から云ふと、はじめの内は、我々も大學出の連中と同じ事だが、獨逸語が出來て西